## 平成二十七年十月三十日

やら物憂く、 我が名を呼ぶ人あるに氣づく。その人、徐々に聲を大にし、我が肩を大ひに搖さぶる。 閑靜にして何らの變哲無き住宅地、その街路を確たる當て無きまま緩やかに歩く。 まなこゆるりと開けば誰やらの顏、 目に觸るるほど近くにあり。 何

が笑ひ聲に混じると思ひたるは後のことなり。 葉探すほどには腦內廻らず。「暜通」と應ぜむを決め、 中身は何か、 我が應ずるを息詰めて待ち、 來たらず。 見たりや。 思ひ出さむと努む。理屈も筋も無き夢にして、 ううう・ふ・・「ふ・つうう・・」と聲を絞り出せば、 いかなる夢なるか。 その應じやう正常の範圍内なるを得て安堵せる氣分、 良き夢か、惡きか」と立續けに問ふなり。 我、かく、 言はむとすれどその初めの音なる、 手術の麻醉より覺めたり。 格別のことなし。 數人の笑ひ聲す。 相應しき言

なる向きにして室内に入れたるか覺えず。麻醉界への出入りを繰返し居たるらし。 て我が病室に向ふを知る。 我が横たはる寢臺を白衣の人數人が押す。目を薄く開きて天井の動くを見、 廊下を通り、 室の前に到著の場面を記憶するも、ベッドをい 手術室を出 か

異常なきや見出さむと我を見入るを賴もしく嬉しく思ひ、 これ當にその圖なり。 下より映し、 いかほどか經て我に返れば、 いづれも白きマスクす。テレビドラマにて、 畫面の周圍には眼前にある醫者等の大なる顏數個を配することしばしばあり。 皆、 真劍な眼差しで我を見る。 六 七人の人、寢臺の兩側に立ち、上から我が顏に目を注 寢る患者の視點にカメラを置きて天井を なほ朦朧とすれども、 安心の氣持ちす。 かく多き人、

後入院先にて先生の個人授業受けたる友、 ること記憶せず。 幼き日よりこれまで大病のことなければ、己れ一人がために複數の醫者集ひくれた 永く意識の下にありたるを事實と言はざるべからず。 患ひて親類緣者友人の心配を集むる人を羨ましと思ふ心持、 今にして思へば、 怪我の故に登校せずともお咎め 彼らを見てさもありたしと微かに願ふ自分なり 無かりし友、 倒錯心理に疑ひ 盲腸手術

自らなり果てけり。 諸處の煩慮を申譯無くも有難しと思ひたれども、 今囘、 醫師看護師多數看取り下され、そを樂しむと言ふは言葉が過ぎ、 心中、 ひとまづの決著を得、 この倒錯せる羨望感らしきもの 步大人になりたる心地す。 また 知 の對象に 人その

これ健康回復の他なる手術の一成果に數ふべし。

(平成二十八年二月十八日受附)